Tea Room（ティールーム）

図書館をめぐるあれこれ

西川（にしかわ）　葉澄（はすみ）
（総合政策学部専任講師）

図書館についてずっと疑問に思いつつも放置してきたことがある。それは英語のlibraryが，フランス語ではbibliothèqueとなる謎である。ドイツ語のbibliothek，スペイン語，イタリア語，ポルトガル語のbiblioteca，ラテン語のbibliothecaなど，図書館を表す語がbiblioから始まるタイプは多い。この機会に語源を調べると，これらはギリシャ語のbibliothékēに由来する（本＋置場の意味）。一方，平凡社大百科事典によるとlibraryの語源は「木皮を意味するラテン語liber」に由来するという。フランス語辞書のLittréを見ると，かつてはフランスでもlibrairieが図書館の意で使われていたとの記載がある。librairieは現代のフランス語なら書店のことである。

慶應の図書館は言わずもがなメディアセンターという名称である。書物の他にデジタル資料等も扱うためだろうと，名称の由来について深く考えたことがなかったが，今回恥ずかしながら初めてメディアセンターのWebサイトにある概要・沿革を拝見し，1871年に設置された図書室が後に各キャンパスの大学図書館に拡がり，やがてメディアセンターとして有機的につながっていく歴史に胸が熱くなった。

さて，図書館といえばボルヘスの「バベルの図書館」のような小宇宙ともいえる神秘的な建物に計り知れない量の蔵書が詰められた謎の空間をついつい思い浮かべてしまう。2000年以前に出版された蔵書を全部廃棄処分にした大学図書館の話を聞いたことがあるが，そうしたニュースに恐怖を感じる私のような人間にとって，図書館とは願わくば新旧とり混ぜ様々な本を包容していく小宇宙であってほしい。そのため図書館の建物は大きければ大きいほど安心する。永田町の国立国会図書館の高い天井の下にいると高揚感に包まれるし，サッカースタジアムのように広大なパリのフランス国立図書館はまるでユートピアのようである。華麗かつ壮大なロンドンの大英図書館も，アメリカの駅のように天井が高くやや薄暗いボゴタの国立図書館の建築もみんな素晴らしかった。

もちろん大学図書館も最高だ。北米の大学図書館もいくつか通ったが，レンガやコンクリートブロックで組んだ壁の内部がそのままペンキで塗られたような建物が多く，その無造作な感じもまたたまらない。本との偶然の出会いがある開架式が好きだが，閉架式の魅力も捨てがたい。予約した本が出てくる瞬間はまるで誠実な友達に願いが聞き届けられたようでもある。

学生時代にはもちろん大学図書館でアルバイトをした。受付で貸出・返却手続きをしたり，返却された本がぎっしり詰まったカートを押して，本が元いた場所に忠実に戻すのだ。それらは実に楽しい作業だった。

図書館が舞台になる小説もいい。まずは村上春樹の『図書館奇譚』を思い出す。主人公はひょんなことから図書館の老人により図書館地下の謎の空間に幽閉されてしまう。牢屋では静かに読書をし，食事の他にも寝る前にドーナツとジュースが羊男から差し入れされる。逆にご褒美ではないか。主人公は「やれやれ」と呟く。村上に影響を与えたであろうR・ブローティガンの『愛のゆくえ』も変わった図書館に住む男の話である。1975年の青木日出夫訳では主人公が「やれやれ」（Well）と呟くのだが，それは彼が図書館から出てメキシコにいる時のエピソードだ。他にも図書館を舞台にしたおすすめの作品があればぜひ教えていただければ幸いである。